

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006 ～ 2008

課題番号：18720161

研究課題名（和文）日本（人）イメージが豪州のホワイトネス形成に与えた影響に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Australia's Whiteness and Images of Japan and the Japanese

研究代表者

村上 雄一（MURAKAMI, YUICHI）

福島大学 行政政策学類 准教授

研究者番号：10302316

研究成果の概要：

主に日本およびオーストラリア連邦における海外調査の結果、これまで、あまり知られてこなかった、明治時代の日本海軍訓練船のオーストラリア寄港の全体像を把握することができた。そして、そのような日本海軍訓練船のオーストラリア訪問が、オーストラリアで本来、ドミナントな白人集団であったはずのアングロ・ケルト系オーストラリア人が、1900年代において周辺の集団であったはずの日本人を「優秀であるがために危険である」と、あたかもドミナントな集団として取り扱い、彼ら自身を意図的に周辺の集団と位置づけることで、白豪主義政策や軍備増強政策の正当性に、一定程度以上の影響を与えたことを論証する一次史料を中心とした文献収集、ならびに、そこから得た新しい知見に基づく執筆および学会等で報告等を行うことができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	150,000	2,550,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 史学・史学一般

キーワード： 日豪関係 アイデンティティ 白豪主義 イメージ 白人 ホワイトネス

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は平成 14 年度から 15 年度まで、国立民族博物館の共同研究会「世界における『白人』の構造化」に共同研究員として参加した。この共同研究では、これまで「白人」は、文明の標準、西洋の規範、未来の理想像とされてきたために、歴史的に形成された特殊な存在として総合的な研究対象となることがなかったという問題認識の上に立ち、「白人」という存在の歴史的形成とその世界的展開、そして、それが現在のグローバリズムと呼ばれる普遍主義的世界観にいかに関与を及ぼしているかについて調査した。この研究会の調査・研究成果は、藤川隆男（編）『白人とは何か？ ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房 2005 年）という形で結実し、日本で初めての白人研究の紹介書となった。研究代表者もその中の一章として、「オーストラリアにおける『白人』の創造と大英帝国 1870 年代から 1901 年までを中心に」を執筆した。その中で従来のオーストラリアの労働史研究では、人種差別の視点が中心であり、反中国人運動を通じた白人労働者階級の形成という視点が必ずしも明確に示されてこなかったことを明らかにした。具体的には 1880 年代のメルボルンにおける家具職人の労働組合を中心とした反中国人運動を考察することで、「労働者階級であること」＝「白人男性であること」を検証した。このように共同研究を通して、オーストラリアにおける反中国人運動とホワイトネスの形成の関係を明らかにしたが、その考察の延長線上として、オーストラリア連邦結成の 1901 年以降、このようなホワイトネスの形成に対して、日本(人)イメージも大きく影響を

与えたのではないかという仮説を立てるに至った。例えば、オーストラリアの歴史家ミーニー（Meaney, Neville. *The search for security in the Pacific, 1901-14*. Sydney University Press, 1976）によれば、1905 年から 45 年までの間、20 年代の一時期を除いて、オーストラリアの国防と外交政策は日本に対する恐怖心によって支配されていたという。しかし、これはアングロ・ケルト系オーストラリア人が 1901 年の連邦結成後もホワイトネスを形成・強化するために、当時、周辺の集団であったはずの日本(人)をあたかもドミナントなものと捉え、その危険性を強調しなければならなかったということも大きく影響していたのではなかったのではないかという仮説を立てたのが、この研究の背景であった。

2. 研究の目的

研究代表者の全体構想は、多文化主義を政策とする現在のオーストラリアで、新自由主義の経済政策のもと移民排斥や右翼勢力が復活してきている現象と、歴史的なアングロ・ケルト系オーストラリア人のホワイトネス（白人性）の形成が、どのように関連しているのか、及び、その歴史的形成において、オーストラリアにおける日本(人)イメージが、支配的集団であったアングロ・ケルト系オーストラリア人のホワイトネス形成に与えた影響について、ホワイトネス・スタディーズの視点から考察することにある。

その中で本研究の具体的な目的は、主に 1900 年代のオーストラリアにおける日本(人)イメージがアングロ・ケルト系オーストラリア人のホワイトネスに与えた影響について考察し、基礎的な白人研究の一端を担う

ことである。

3. 研究の方法

科学研究費補助金交付の初年度にあたる平成 18 年度は、まず、日本国内で基本的な二次文献及び史料収集をでき得る限り進めた一方、さらなる史料の所在を調査・確認し、渡豪のための下調べをした。具体的には所属大学の付属図書館を通しての通常の文献・史料収集、及び、インターネットによる国内外の情報を収集した。また、補助金受入以前の 6 月 10 日から 10 日かけて、慶応義塾大学で開催されたオーストラリア学会の 2006 年日豪交流記念第 17 回全国研究大会に参加し、最新の研究動向について調査するとともに国立国会図書館や慶応義塾図書館に出向き、先行研究文献を中心に史料収集を行った。史料収集及び論文執筆を円滑かつ効率的に進めるために、一次史料等で公刊されていないものは、デジタルカメラでの撮影、または、ノートパソコンを持ち込み書き写した。

上述のような国内での下調べを入念に実施した後、オーストラリアへの第 1 回海外調査へ向かった。1900 年代当時、2000 名以上の日本人が年季労働者として滞在していたクィーンズランド州の州都ブリスベンに位置する、オーストラリアでも屈指の大学であるクィーンズランド大学の付属図書館や、州立文書館を中心に、文献・史料収集に着手した。具体的には、できる限り新聞記事や連邦議会議事録など、日本では入手困難な 1 次史料を中心に収集を行い、新聞記事などはマイクロフィルムからの安価な複写を中心に行った。

平成 18 年度の国内や海外調査旅行で入手困難であった史料を収集すべく、平成 19 年度は、国内およびオーストラリアにおける海外調査を継続して行った。まず、平成 19 年 6

月に開催されたオーストラリア学会全国大会プログラムに参加し、最新の研究動向や情報の収集を行った。また平成 19 年 7 月末から 8 月にかけて、オーストラリア連邦および 4 州(西オーストラリア州・南オーストラリア州・ニューサウスウェールズ州・クィーンズランド州)の海事博物館ならびに州立図書館を中心に史料収集を行うことができた。特に南オーストラリアでは、これまで存在が一般に知られていなかった日本海軍士官候補生の墓地ならびに当時の新聞報道記事などを発見することができるなど、当時の日本海軍訓練船のオーストラリア寄港がオーストラリア社会に与えた影響を考察する上において参考になる多くの収穫があった。

平成 19 年度の国内や海外調査旅行で入手困難であった史料等を収集すべく、平成 20 年度は、国内およびオーストラリアにおける海外調査を継続して行った。まず、平成 20 年 6 月に開催されたオーストラリア学会全国大会プログラムに参加し、最新の研究動向や情報の収集を行った。また平成 21 年 3 月には、昨年度実地調査ができなかったヴィクトリア州の諸博物館や州立図書館、ならびに、ニューサウスウェールズ州シドニーに存在するオーストラリア国立海事博物館ならびに州立図書館を中心に史料等を収集することができた。特にヴィクトリア州では、日本海軍士官候補生の墓地ならびに当時の新聞報道記事などを確認することができるなど、当時の日本海軍訓練船のオーストラリア寄港がオーストラリア社会に与えた影響を考察する上において参考になる多くの収穫があった。

4. 研究成果

平成 19 年度は、これまでの国内外調査の研究成果を活用して、オーストラリアで 2007

年に出版された日豪関係に関わる最新の書籍2冊 (Michael Ackland and Pam Oliver 編著 *Unexpected Encounters: Neglected Histories behind the Australia-Japan Relationship*) および田村恵子著 *Forever Foreign: Expatriate Lives in Historical Kobe*) の本邦初の書評をオーストラリア学会編集の『オーストラリア研究』第21号(2008年3月)において発表することができた。また、一章を執筆担当した *On the western edge: comparisons of Japan and Australia* が平成19年にオーストラリアで出版された。

平成20年度は、これまでの国内外調査の研究成果を活用して、オーストラリア学会でのフォーラム「オーストラリアにおける白人性の相克」で報告に対するコメントを準備のうえ発表した。そのフォーラムでのコメントは平成20年12月『西洋史学』第231号に掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

村上雄一 「第二のコメント 松本報告に対して」 『西洋史学』 第231号 2008年 pp.75-77 査読無

〔学会発表〕(計1件)

村上雄一 「『オーストラリアの移民規制問題と大英帝国の問題』に対するコメント」 オーストラリア学会 2008年6月7日 追手門学院大学(大阪府茨木市)

〔図書〕(計1件)

MURAKAMI, Yuichi, 'Love of things Japanese', Masayo Tada and Leigh Dale, eds., *On the western edge: comparisons of Japan and Australia*, Network Books, 2007, pp.55-66.

〔その他〕

村上雄一 「<書評> Michael Ackland and Pam Oliver 編著 *Unexpected Encounters: Neglected Histories behind the Australia-Japan Relationship* (Monash University Press, 2007) 田村恵子著 *Forever Foreign: Expatriate Lives in Historical Kobe*(National Library of Australia, 2007)」 『オーストラリア研究』 第21巻 2008年 pp.74-77 査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 雄一 (MURAKAMI YUICHI)

福島大学・行政政策学類・准教授

研究者番号: 10302316